

佐賀県研究成果情報（平成 23 年度）

ナシの摘果時期が黒星病の発生におよぼす影響					
〔要約〕 ナシの開花後に行う摘果作業の時期が遅くなると、黒星病の発生が多くなる傾向にあるので、早期摘果を行う必要がある。					
果樹試験場・病害虫研究担当				連絡先	0952-73-2275 kajushiken@pref.saga.lg.jp
部会名	果 樹	専 門	果樹病害虫	対象	ナシ

〔背景・ねらい〕

ナシでは5月上旬（‘幸水’の満開30日頃）に摘果作業が行われるが、この時期は黒星病の初発時期にあたることから、生産農家の間では黒星病の発生を一旦待ってから摘果作業を行おうとする考え方がある。一方で、ひとつの果そうに、多くの果実が着果したままだと、薬液付着の低下や果実肥大の遅れが懸念される。

そこで本試験では、摘果作業の時期が黒星病の発生におよぼす影響について明らかにする。

〔成果の内容・特徴〕

- 1 開花後に行う摘果作業の時期が遅くなると黒星病の発生が多くなる（表1）。
- 2 現在、慣行栽培では満開30日後を目安に粗摘果が行なわれているが、摘果の時期がこれより遅れないように注意する。

〔成果の活用面・留意点〕

- 1 早期摘果は黒星病対策のみでなく、果実肥大促進の点からも有効である。
- 2 黒星病が発病した果実は園内に放置せず、土壌中に埋没するか、園外に持ち出して処分する。

第1表 粗摘果の作業時期がナシ黒星病の発病におよぼす影響

処理日		発病果そう率(%)			
		4月22日	5月3日	5月16日	8月2日
満開20日後摘果 (4月22日)	果実	0	0	0	0
	葉	0	0	0	0
満開30日後摘果 (5月3日)	果実	0	0	0	0
	葉	0	0	4	4
満開40日後摘果 (5月16日)	果実	0	0	8	0
	葉	0	0	4	4

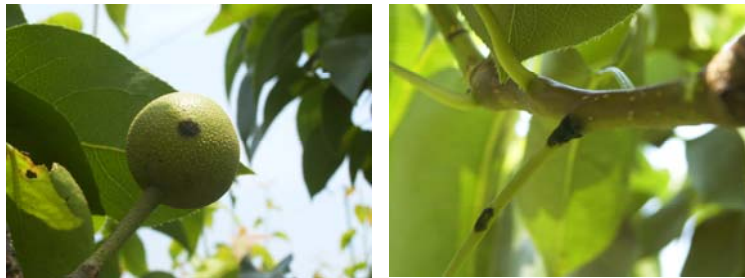


図1 ナシ黒星病(左:幼果の病斑、右:葉柄の病斑)



図2 粗摘果前の果そう(満開 20 後頃)

[その他]

研究課題名：食の安全・安心志向に対応した果樹病虫害制御技術の構築

予算区分：国庫補助

研究期間：2009～2011 年

研究担当者：井手洋一、野口真弓、口木文孝

発表論文等：平成 22 年度 佐賀県果樹試験場業務年報